町民文芸

只見短歌会　令和三年十一月詠草

風邪に伏す我が枕辺に老寄りて風邪を引くなとこんこんと言ふ　馬場　八智

年下の従姉の葬儀子に頼み時計を見つつ両手を合わす　渡部ゆき子

走馬灯のごとくめぐりし思ひ出はあの日あの頃年ごと深し　関谷　登美子

不揃いに笑ひをさそう生物を実りの証と丹念に取る　目黒　富子

体温計壊るる知らず老い母の発熱と思ひ施設断る　新国由紀子

昨年の早き降雪に今年こそと畑片づけるも日々はかどらず　渡部ヨリ子

かたことに話かけくる曾の孫に耳遠きわれ微笑みて聞く　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　十一月定例会

行き暮れて見上げる空や十三夜　信

石仏の眼差し遠く秋麗　都

秋晴れに医者のはしごに薬かな　一恵

読み返す新聞紙面暮れの秋　一恵

槌音の心地よきかな郷の秋　一恵

幼子のきちきち追いて飽きもせず　一恵

掃き集む銀杏落葉や空仰ぐ　真理子

朝焚火田園風景独り占め　真理子

秋浅しまわり道して一万歩　睦子

秋色に染まる山肌鳥旅立ちぬ　睦子

雑踏にふと立ち止まり十三夜　紺青

母の炉を開き心の炉を開く　紺青

紅葉の亡き兄偲ぶ牛寅まつり　妙子

梅もどきリース飾りし老いの部屋　妙子

冬ぬくし医院の名残りガラス戸に　恒夫

空耳の妻の返事や十三夜　恒夫

ゆっくりと日差しちりばむ冬立木　礼

三本の杭の隙間の茶の花よ　礼

温暖や大根の太きを嘆きおり　一穂

秋の夕また可憐花倒しけり　一穂

赤松を圧するごとくに十三夜　修一

剥きやすし里芋選び宅急便　修一